



Title	大学院生における論文執筆上の困難点と課題 : タイの大学院生への質問紙調査から
Author(s)	Soysuda, Na Ranong; 村岡, 貴子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2024, 28, p. 35-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94688
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大学院生における論文執筆上の困難点と課題

— タイの大学院生への質問紙調査から —

Soysuda Na Ranong*・村岡 貴子†

要 旨

大学院での研究指導に関する課題とその背景を明らかにするために、本稿では、萌芽的な調査研究として、修士論文や博士論文、およびその研究報告に従事した大学院生・元大学院生に対する質問紙調査を行った。調査協力者は、タイの国立大学の某大学院で研究経験がある、タイ語か日本語を母語とする9名で、論文執筆言語はタイ語か日本語か英語である。調査では、研究活動上の論文執筆過程における困難点とその理由を尋ねた。その結果、協力者の多くに共通する困難点は、論文の考察部分の記述、自身の論文の推敲、および研究課題の設定であり、いずれも協力者は繰り返し検討や改善を求められる作業であることを強く意識していた。また、共通して高く評価された点は、セミナーで得られたコメントや指導の有用性であった。以上の議論から、研究上の支援として、研究活動の全過程および論文執筆の各局面での活動とその目的の意識化を一層図り、他者のコメントを受ける機会を充実し、かつ困難点や課題の背景をリソース化して教員や大学院生と共有する等により、論文執筆者としての内省の深化に役立てる可能性が指摘できる。

【キーワード】 タイ、大学院生、論文スキーマ、論文執筆、支援

1 研究の目的と背景

本稿では、萌芽的な調査研究として、タイの大学に在籍する大学院生による研究活動における論文執筆上の困難点と課題を明らかにし、それらの考察から、教員側からの支援に必要な視点を探ることを目的とする。

以下、その背景として、研究活動やそこでの論文執筆に関する4点について、先行研究に言及しつつ記述する。

まず、研究倫理に関する啓発が厳しく求められるようになって久しい。周知の通り、大学や研究科単位だけでなく、全国学会等では、公式ホームページにおいて、論文執筆に関するルールを含めた研究倫理に関するガイドラインを作成し、広く公開・啓発

を行っている。若島他(2009)は、研究倫理について、日本の心理諸学会の規定を分析し、1) 研究としての心構え、2) 研究の計画立案時、3) 研究遂行時、4) 研究成果の公表、および5) データベースに関する倫理に分類した上で、規定の記述をまとめている。これらの研究倫理の事項は、筆者らの専門分野である日本語教育学の場合にも通底するものである。例えば、研究テーマの設定や、文献の読解から引用、論文の論理構成、さらには書記言語形式の選択等、研究活動全般の各局面に関係するため、論文執筆に直結するものとして非常に重要なものである。したがって、論文指導の際にも不可欠な項目であると言える。

次に、日本語教育学におけるアカデミック・ライティング(以下AW)教育の実践と研究の観点から

* タイ国 カセサート大学人文学部元准教授

† 大阪大学国際教育交流センター教授

述べる。日本語教育学において、上記のような論文執筆のための教育や支援に関連した研究の蓄積があり、文章の表現や構造の分析、学習者の文章の問題分析に加え、学習活動や教育支援、評価活動等、関連教育の多様なテーマの研究が進み、さらなる充実が図られている（村岡・鎌田・仁科編著 2018等）。こうした状況において、大島（2023）は、日本留学のおもな流れとともに、日本語学校等、大学学部/専修学校等、大学院といった在学段階に分け、必要な指導内容の概観を行っている。大学院進学に必要な研究計画書等、在学段階で求められる文章ジャンルの差異の存在は明らかである。このように在学段階別に考えれば、AW教育の研究は、特に、初年次教育に着目したもの等、学部生を対象としたAW教育の研究が盛んである一方、大学院レベルの学生に対する教育実践や関連の研究（村岡 2014a, 村岡・堀・坂尻 2017等）はまだ多くない。大学院生は、修士論文や博士論文といった学位取得に必要な、時間を要する規模の大きな論文を執筆する必要があることから、論文や研究とは何かの概念知識の総体である論文スキーマ（村岡 2014b）の形成がきわめて重要である。加えて、大学院生は、研究中心の大学生活を送り、その集大成としての論文執筆が求められる。そのことから、大学院生にとって論文スキーマ形成に沿ったAW能力の獲得は死活的に重要である。そこで、AW教育とその研究は、研究活動における論文執筆という、より大きな視点から捉える必要性があると考えられる。

3点目として、大学におけるAWの関連研究では、昨今学習者の学びの過程に着目した研究も見られるようになってきている。すなわち、学習の対象（文章）や教材、方法論だけでなく、AWを学ぶ学習者の意識やその変容を扱い、AW教育への示唆を提供する研究である。例えば、大島（2021）は、初年次教育でAW教育を受けた学部生の学びの過程が詳細に語られた質的研究である。これは、特定の時期や局面のみを扱った研究とは異なる。こうした学生自身による視点からAWについてのふりかえりを質的に考察した研究は、当該の学習・教育をより俯瞰的に見て、学習者の発達・成長の観点から捉えるために、今後も重要なものとして位置づけられると考えられる。関連して、村岡（2018）は、AW教育研究は「学習者の学び方自体を、その多様な背景をふまえて観察し、記述することによって研究する」ことの重要

性（p.8）を指摘している。また、心理学の観点からは、西垣（2011）により、研究対象が、学習の過程への着眼点を有することの重要性が指摘されており¹⁾、心理学研究の観点から、大学におけるAW教育の現状への批判を展開している。以上のように、今後も、大学における学生の学びの過程を丁寧捉えることにより、関連研究の視点や方法論の射程をより拡大する意義が認められる。その必要性和意義は、本稿のように、大学院生のケースにも該当すると言える。

4点目として、一般に大学院では、個々の大学院生が受ける研究指導の場面で、論文執筆の過程に関して、実際に多くの指導教員がゼミ等の形式で対応している。狭義のAW教育ではなく、大学院生の研究活動を包括的に捉えた論文指導のために指導教員が共通して有する問題・課題を、具体的な事例に基づいて分析した研究はあまり見られない。少数の例として、長田（2023）と山本（2023）は、それぞれ、日本の大学での法学系と経済学系の場合の研究指導・留学生教育について実践を報告し、その中の例として、引用に関わる指導の難しさについて議論している。こうした研究指導に関係する問題・課題は論文スキーマの形成に関わるものであり、専門分野の違いを超えて共通するものがあると考えられる。同時に、これらは言語の違いを超えて共通するものであると推測される。

以上のような問題意識と背景に基づいて、本研究では、次の研究課題を設定する。

- ① 個々の大学院生は、修士論文や博士論文といった論文の執筆過程において、具体的にどのような困難を抱えているのか。
- ② 大学院生が上記①のような困難があると考えられる理由は何か。
- ③ 上記①の困難と②の理由を踏まえ、今後、指導教員からは、どのような指導や支援が求められると言えるか。

本研究の一環として、本稿では、まず、関連する具体的な問題や課題の現状を把握するために、第2章に示すように、機縁法により小規模なアンケート調査を行った。その結果と考察を報告する。なお、本研究では、このアンケート調査に続き、若干名に絞って質的なインタビュー調査も実施したが、その

結果分析については別稿に譲る。

2 調査の概要

2-1 調査協力者

本研究の調査協力者は、機縁法により、タイのある国立大学大学院に在籍する、あるいは在籍していた9名であり、調査時点で、次の表1の通りである。

表1 調査協力者の母語および在学段階

協力者	母語	在学段階
A	タイ語	修士2年
B	タイ語	修士2年
C	タイ語	修士3年
D	タイ語	博士2年
E	日本語	博士3年
F	タイ語	修士修了生
G	タイ語	修士修了生
H	日本語	修士修了生
I	日本語	修士修了生

調査時点（2023年6、7月）において、この9名のうち、Hは調査終了直後、Fは4年前、GとIは5年前にそれぞれ修士課程を修了している。つまり、上記の4名からは、修了生として大学院生時代の研究活動について回答するという調査協力を得たことになる。

調査協力者の専門分野は9名全員が日本語教育学である。母語は6名がタイ語で、3名が日本語である。タイ語母語話者の6名はタイ語で論文を執筆し、日本語母語話者の3名のうち2名はタイ語で、1名は日本語で執筆した論文を英語に翻訳した。

なお、こうした元大学院生の場合、元指導教員や同じ専攻の教員との連絡が取れており、研究活動について振り返る好機として今回の調査に協力が得られることとなった。在学段階も含め、研究歴の違いは論文スキーマ形成への違いを生じさせ得るものと考えられる。しかし、本研究は、萌芽的な研究として、まず、研究活動への従事経験があつて背景の異なる調査協力者が、本研究の調査の質問に対して、どのような共通した「言語化」を行うかを探索的に検討するという観点から、少数であるが調査の意義が認められると考えた。

2-2 調査の概要

調査はオンラインによる質問紙調査であり、2023年6月下旬から2023年7月初旬にかけて実施した。

調査協力者には事前に、調査の目的・概要、および個人情報・プライバシー保護について、Eメールを通して個別に説明を行い、その後、調査協力への承諾書を受け取った。

調査項目は、論文や研究計画を指導する際に困難を感じた問題や課題となったことを問うものである。質問紙調査は、表2と次ページの表3の通り2つのパートに分けられている。

パート1の質問は9問あり、難しいか難しくないかとの選択式の質問であるのに対し、パート2の質問は自由記述式のものである。調査票はタイ語と日本語を併記して示し、自由記述では、どちらの言語で回答してもよいとした。なお、調査票の両言語による質問の記述は、各々の母語話者がネイティブチェックを行っている。

まず、以下の表2では、1から9に示したように、困難点として、研究活動開始時の検討から、指導を受けた際の論文の改訂作業までの段階を分類して尋ねた。これは、論文を執筆している時期のみならず、その段階に進む以前からの種々の準備（テーマや方法論の選択等）を含めている²⁾。すなわち、テーマ設定、研究課題の設定、調査方法の選択、データ収集、結果の分析と考察、論理的な文章の執筆、論文文章の推敲、論文における表現の選択、指導教員からの指導後の論文改訂の9点である。

表2 質問紙調査の選択式の質問（パート1）

質問内容
1. 論文（修士論文・博士論文など）のテーマを見つけることは難しいか。
2. 論文（修士論文・博士論文など）の研究課題（リサーチクエスション）を設定することは難しいか。
3. データ分析に必要な調査方法を選ぶことは難しいか。
4. 論文のためのデータ収集をすることは難しいか。
5. 研究の結果の分析・考察を行うことは難しいか。
6. 論文として論理的に文章を書くことは難しいか。
7. 一度書いた論文を自分で読み直して推敲することは難しいか。
8. 論文にふさわしい表現を選ぶことは難しいか。
9. 指導教員からコメントを受けた後に論文を書き直すことは、難しいか。

表3 質問紙調査の自由記述式の質問 (パート2)

質問内容
1. 研究テーマ (修了生の場合は大学院在籍時のもの)。研究テーマをどのように設定したか。
2. 引用部分を書く際に、問題がある (あった) か。あれば、どのような問題か。
3. 研究で使用する (使用した) データは、具体的にどのようなものか。
4. セミナーは自分の研究にどのように役立ったか。
5. 自分の研究活動 (論文執筆) を振り返り、今後大学院で学ぶ後輩にどのようなアドバイスができるか。

次に、表3では、1から5に示したように、自由記述式で、協力者個人毎のテーマやデータ、引用時の問題の有無、指導教員等とのセミナーへの評価、および、今後の後輩への助言の4点を尋ねた。本稿でのセミナーとは、タイの大学院で行われている必修科目のもので、定期的な研究指導や、複数の大学院生が参加する、研究関連のディスカッションの機会を意味する。なお、指導教員が大学院生に個別に指導する機会も別途存在する。

表3に示したものは、パート1の選択式回答に関連する場合に参照する目的で、また「引用」については研究倫理の関係できわめて重要な習得すべき事項でもあることから、その難しさについての回答を求めた。なお、この中で、1のテーマと3の手法については、例えば、定量的研究か定性的研究かによって、難しさの局面や質が異なると考えられたことから、調査項目に入れておき、表2の回答に関連する参照事項として扱った。本稿では、個人情報保護の観点から、データの公開は割愛する。

また、「後輩に対するアドバイス」には、協力者個人毎の人が、自身の研究活動を振り返り、困難点だけでなく、それを乗り越えて成長したと自己評価する点が含まれていると考えられたため、質問項目に入れた。

3 結果と考察

3-1 選択式質問への回答

まず、表2の項目の各回答の全体に占める割合について、以下の表4に示す。表4の左端の質問項目欄には、表2の内容を簡略化して示すこととする。なお、9の指導教員からの「コメントを受けた後」は簡略化して「査読後」という表現で代用する。

表4 質問紙調査パート1の回答

難しさを感じる対象	難しい (%)	難しくない (%)
1. 論文のテーマ設定	6 (66.7%)	3 (33.3%)
2. 研究課題の設定	7 (77.8%)	2 (22.2%)
3. 調査方法の選択	5 (55.6%)	4 (44.4%)
4. データ収集	6 (66.7%)	3 (33.3%)
5. 分析・考察	8 (88.9%)	1 (11.1%)
6. 論理的な文章の執筆	6 (66.7%)	3 (33.3%)
7. 自身の論文の推敲	8 (88.9%)	1 (11.1%)
8. 適切な論文表現の選択	6 (66.7%)	3 (33.3%)
9. 査読後の文章の改訂	4 (44.4%)	5 (55.6%)

表4の回答に示した、最も難しいと考えられた対象は、5.の「分析・考察」と「自身の論文の推敲」であり、9名中8名までが難しいと回答した。続いて、2.の「研究課題の設定」も、9名中7名が難しいと回答している。

これら3点の困難さ、難しさの対象と理由について、以下、3-1から3-3に分けて、回答に見られた理由を順に各々示すこととする。

3-1-1 「分析・考察」の難しさの理由

質問項目5の「分析・考察」が難しいと回答した8例の記述を以下に示す。なお、考察にあたって特に着目した点として、回答の一部に下線を施す (以下同様)。

回答1 : 「結果の分析・考察のところは最も注意しなければならぬから難しい」

回答2 : 「考察が難しい。苦手なところなので、色々調べなければならぬ」

回答3 : 「例えば、数量が大きいデータを数値化したり、表にする際に、数が多ければ多いほど、間違いが起りやすく、その間違いを見つけにくい。これまでの研究と差異を意識して考察を行うことが難しい。」

回答4 : 「研究成果を分かりやすく書くことと、読み手を納得させる書き方が難しい」

回答5 : 「研究課題にそって、論理的に明らかにように考察するのが難しい」

回答6 : 「すべての研究課題をカバーできる書き方が難しい」

回答7 : 「数字や統計的な分析がよくわからないことがあるから難しい」

回答8：「結果の分析で、慣れない統計を扱うのは難しいなと思いましたし、その結果から何が言えるのか先行研究などを参考にしながら考察をまとめることが一番難しいと思いました」

以上に示した難しさの理由から、共通する点は、深い論理的思考に基づいた考察を徹底する作業や、それらの書き方、および、テーマによっては統計的な説明等において困難が感じられているものと言える。

回答3は、多くのデータを扱って数値化した際に示す図表への言及から、「問題が起こりやすく」「その問題が見つけにくい」といった具体的な困難点の指摘を行っていた。また、回答4のような「わかりやすさ」や「読者の納得」、5の「論理性」等の重視は、決められた手順で行う作業についてではなく、読者を意識しつつ時間と労力をかけて熟慮を繰り返し、検討を継続して獲得できることが認識されている回答である。回答8も「その結果、何が言えるのか」と表現したように、容易に解が得られない困難さを指摘している。

一方、「難しくない」と答えた1名の理由は「適切な調査方法が見つかればそれほど難しくない」であった。このケースは、まだ研究途上であり、深い考察までは到達していないという背景には言及できる。ただし、上記の「難しくない」と回答したケースの詳細な背景については、質的な分析も必要となるため、ここでは割愛する。

3-1-2 「自身の論文の推敲」の難しさの理由

質問項目7の「自身の論文の推敲」が難しいと回答した8例の理由を以下に示す。

回答1：「自分で読み直しても間違いが見つかりません。第三者に読んでもらうほうが良いと思います」

回答2：「自分が使った表現は、他者に伝わらないことがある。親友でもわかってくれない場合がある」

回答3：「大変難しいと思う。読み直すたびに間違いや、言い換えや、書き直し箇所が見つかり、永遠に終わらないように感じた」

回答4：「自分で読み直すのはかなり時間がかかり、一週間おいてまた読み直すほうが良い。それには時間と忍耐が必要」

回答5：「自分は、筆者としてよくわかっているが、抜けている部分があるはず」

回答6：「自分で書いたものを自分で推敲するのは難しい」

回答7：「一回で書き終わられるわけではないので、表現等を統一するにはかなり時間がかかってしまう」

回答8：「書いた後すぐに読み直して推敲することは、自分では十分に理解してわかりやすく書いたつもりでも読み手にきちんと伝わるかどうかどうして不安が残るので難しいと思います。1～2日ほど時間をおいて読み直すと自分の頭がリセットされて、書いた直後に読み直すよりは推敲しやすいと思います。」

以上の回答を観察すると、協力者8名に共通する点は、自身で行う推敲作業は、かなり負荷のかかるものであり、間違いや不適切な箇所を見つけることが困難であるとの印象を持っていることである。回答2の「他者に伝わらない」「親友でもわかってくれない場合がある」、回答3の「永遠に終わらないと感じた」、回答4の「時間と忍耐が必要」、回答5の「抜けている部分があるはず」、回答7の「一回で終わるわけではない」、回答8のように「読み手にきちんと伝わるかどうかどうして不安が残る」のように、自身の推敲作業を終えてもなお、修正作業が必須であることを強く意識した回答が目立った。

また、解決方法の一つは、回答1のように、他者に読んでもらってコメントを受けたり、回答8のように時間をおいた後、読み直して推敲したりする方が述べられていた。

これらの結果は、大学院生として、論文の文章をより正確に、厳密に、また適切に表現することの難しさを表しており、それらへの気づきを示していると考えられる。

同時に、当初気づかなかった改訂すべき箇所について推敲する際の、各自の評価基準を有していることがうかがえる。つまり、後で読み直した際に、その評価基準を活用して推敲作業を進めているものと推測される。このことは、読み手に明確に伝わるか否かの懸念が見られるように、単なる誤字脱字や文法・表現の誤用だけを修正しているわけではないことから、数値データの解析も含めた論文としての厳密性や論理性を追求する研究者としての視点を示し

ているものと推測される。

一方、「難しくないと選択した回答は「第三者の視点が必要だ。異なる意見が得られるから。時々自分が間違いを見落とすことがある」と記述されていた。つまり、推敲が難しいとまでは言えないものの、他者のコメントや異なる意見が有用であることの指摘は、先の「難しい」と回答した8名と同様のコメントであると言える。

3-1-3 「研究課題の設定」の難しさの理由

質問項目2の「研究課題の設定」が難しいと回答した7例の理由を以下に示す。

回答1：「研究題目を土台にして研究課題を設定するから。研究題目がある程度明確でなければ、研究課題設定に影響を与えるのではないかと思います」

回答2：「テーマを絞り込んだり、これまでの研究との違いを意識することが難しい」

回答3：「これまでの先行研究との違いと、より深く考えることが難しい」

回答4：「根拠がないといけないから。また、色々絞り込むのが難しい」

回答5：「特に博士論文は実証が難しい」

回答6：「研究課題設定が重要な段階で、また研究方法に繋がるから、決まるまで時間がかかる」

回答7：「テーマが決まっても、その研究の目的を果たすためにぴったりの研究課題を設定するのは難しいと思いました。」

以上の回答を見ると、協力者7名に共通する点は、研究課題設定は重要であり、研究題目・目的・研究方法にも繋がり、時間をかけてテーマを絞り込んだり深く考えたりすることが難しいと認識されていることである。

回答2と回答4はテーマの絞り込みの難しさに言及している。回答2と回答3は、先行研究との違いを意識している。回答7は、「研究の目的を果たすためのぴったりの研究課題」といった表現を用い、テーマ、目的が決まっても、厳密に研究課題を設定するのは容易なことではない困難さに言及している。

一方、「難しくないと答えた2名の理由は、それぞれ「研究テーマが決まれば、何とか研究課題を設定する方向がある」、「ある程度経験を積んで文献読

解が済んで、指導教員のアドバイスと合わせたら研究課題設定が何とかなる」であった。

3-1-4 「査読後の文章の改訂」の難しさの理由

質問項目9の「査読後の文章の改訂」、すなわち、「指導教員からコメントを受けた後に論文を改訂すること」に対しては、5名が難しくないと回答したのに対し、4名が難しいと回答した。

難しくないと回答したケースが若干多かった理由は、セミナーで指導教員から具体的なコメントを受けて、改訂の方針や方策が理解できたことを示すものであろう。また、大学院生が一人で検討するだけでなく、他者のコメントを論文の改訂に活用できたことへの満足感に考えが及んだものと推測される。

以下、まず、「難しい」と回答した例を示す。

回答1：「自分の理由は時々指導教員に納得してもらえない場合があったことであるが、アドバイスを聞いて、それを応用できたらいい成果が出る」

回答2：「より具体的なコメントがあると書き直しがしやすい。とくに言葉や数字を使って、読む人にわかりやすくするようコメントがあった際は、自分一人でアイデアを出すのが難しかったので、指導教員からのヒントが大変役立った」

回答3：「自分からみると、「難しい」と「難しくないと」の中間だと思います。つまり、「難しくないと」言えるのはコメントを得てからガイドラインがあって直すことができる。「難しい」点は自分でもっと文献検索をして、付け加えたり、訂正したりすることです」

回答4：「教授の意図を汲み取ることはがむずかしい」

以上の「難しい」とした回答から、協力者3名が指導教員からのコメント・指摘は有用であったと言える。この質問への回答においても、回答2のように「具体的な」コメントや、「言葉や数字を使って読む人にわかりやすく」とのアドバイスは、それを受けた大学院生も、アドバイスに従って改訂を試みやすかったものと考えられる。回答3のように、コメントを得てガイドラインがあれば改訂が可能で難しくなく、一方、自身で文献検索をして論文の文章を改訂することは難しい、といった厳密な回答も見ら

れた。

回答4の1名は個人的に指導教員の意図を理解できないと回答したが、この協力者は調査時点で、研究計画書の作成途上であり、本格的な論文執筆にまで至っておらず、研究自体の意義等も理解がまだ不十分と推測されるケースであった。

さらに「難しくない」とした回答例を以下に示す。

回答1：「指導教員からのガイドラインが明確である」

回答2：「指導教員が欠点を示したので、訂正ができる」

回答3：「コメントをもらったから、書き直したり付け加えたりすることができる」

回答4：「指導内容が明確である」

回答5：「指導教員の先生から一番多くのコメントをいただいたのは考察の部分でしたが、コメントが明確だったので、何について書き直せばいいかわかっていたのでコメントを受けた後に論文を書き直すことは難しくないと思いました。(ただし、考察すること自体は難しかったです。)」

以上のように、協力者5名とも指導教員からの指摘が明確で、論文を改善するのに役に立ったと認識していたことが明らかになった。指導教員からの助言は、論文の改善や質向上に対する方向性や明確さについて高く評価されており、かつ、大学院生の不安を軽減することに役立ったものと言える。

3-2 自由記述式質問への回答

パート2の質問は5問あり、パート1に関連する課題に基づいて、自由記述形式での回答を求めた。以下、3-2-1から3-2-3に分けて、「引用の困難さの有無とその理由」「セミナーへの評価」「後輩に対するアドバイス」の3点について、この順で回答を記述する。

3-2-1 引用の困難さの有無とその理由

論文執筆における引用について、その困難さの有無と理由について回答を求めた。以下に9名全員の回答を示す。

回答1：「引用の問題はありません」

回答2：「引用の形式に問題があります」

回答3：「引用したことによって問題が起きないように、参考文献からの引用には十分気を使った」

回答4：「日本語の引用を英語のほうに書き換えるのに問題があります」

回答5：「引用したい文献があまり見つかりません」

回答6：「引用範囲を決めるのが難しい」

回答7：「引用方法が様々であり、どれを利用するか忘れてしまうことがあります」

回答8：「引用の出典を書いておかない場合、どこから引用してきたのか混乱します。また、形式の問題もあります」

回答9：「引用部分を書く際の問題は特にありませんでした」

以上の回答1と9のように特に問題がないとしたケースがあったものの、他の回答については、9名のうち2、5、7、8の協力者が、それぞれ引用の形式や出典情報の保存への注意点、引用文献検索等の困難点に言及していた。また、回答3は、引用の不備がないよう注意深くしていたことに触れ、回答6は、文献の内容から引用する範囲を見定めるといった、文献読解と自身の論文への論理的な取り込みについて難しさを表明していた。なお、回答5の「日本語の引用を英語のほうに書き換えるのに問題があります」については、日本語母語話者の協力者が英語で論文執筆を行っている例である。このように母語と執筆言語が異なる場合、思考方法とそれを表示する言語表現が異なるがゆえの困難さも存在すると考えられる。

引用に関する難しさの理由については、ややばらつきのある回答であったが、引用作業そのものの形式への着目と同時に、自身の研究への引用内容の精査に難しさがあるものと考えられる。詳細はより質的な分析を行う必要があるため、本稿での分析は以上にとどめる。

3-2-2 セミナーへの評価

「セミナーへの評価」に対する回答は、以下の通りで、9名全員の回答を示す。

回答1：「研究方法が学べた。同級生との意見交換ができた」

回答2：「セミナーで共に読んだ論文の良いところは自分の研究に応用できるし、反対に、自分

の研究の弱点は改善することができる」

回答3：「研究に対する心構え、データ処理方法、分析方法についての内容が役立った。セミナーと論文執筆のタイミングが重なってれば、よりその内容が役立ち、疑問・質問も持て、その回答が実際に役立ったと思う。私の場合は、セミナーを受けてから論文執筆まで時間があいてしまったので、その点が残念だった」

回答4：「セミナーに参加する教授らの意見・コメントを聞いて、自分の研究世界の視野が広がった」

回答5：「他の人と知識や経験に関する意見交換ができて、自分の視点が広がるし、研究内容に役立った」

回答6：「自分の研究を整理するのに役立ちました」

回答7：「様々な研究論文が勉強になって役立った。また、アイデアが浮かんで自分の研究にも応用できる」

回答8：「研究への刺激を与える。研究とは何か知るようになった。データ分析・議論の仕方が勉強になって、応用できた」

回答9：「自分の研究がどこまで進んでいるのか再認識できる良い機会であり、先生やセミナー出席者から自分では気づけないミスや考察がたりない点についてコメントをもらえる貴重な機会だと思います」

以上のように、共通点としては、セミナーに参加することは大学院生にとって貴重な機会であり、一方的にコメントを聞くだけでなく、意見交換を可能にし、研究に対する自身の視野を広げることに繋がっていることである。そのため、セミナーは、明らかに執筆の改善に役立ったことが示された。

回答3の「研究に対する心構え、データ処理方法、分析方法」といった研究を行う前の基本的な考え方や、今後活用する手法や考察へのアプローチなどは、研究者としてあらかじめ知っておくべき知識を増やし、必要な態度の涵養にも繋がったものと見られる。また、回答8のように「研究への刺激を与える」「研究とは何かを知るようになった」という内省もあり、毎回のセミナーの積み重ねによって論文スキーマが形成されていく状況を、回答者がモニターできるようになったものと推測される。さらに、セミナーは、回答9のように自身の研究の進捗状況を再認識でき

る機会ともなっていることが、回答から示された。

3-2-3 後輩に対するアドバイス

「後輩に対するアドバイス」に対する回答は、以下の通りで9名分を示す。

回答1：

1. たくさん読むこと
2. たくさん書くこと。一日に2、3ページ論文を書く
3. たくさん聞くこと。よく学会やセミナーに参加する。
4. 努力すること。
5. よく指導教員との相談をすること。
6. 最終口頭試験が終わって、落ち込まないで、自分の論文を改善すること
7. 同級生の仲間の友情を保ってお互いに励まし合うこと。
8. 健康が第一

回答2：

スケジュールを計画的に立てておくこと。怠けた時間は執筆する時間より長かったので、そのような問題があれば、乗り越えてください。

回答3：

これは人によっても違うだろうが、興味あるテーマをできるだけ早く見つけて、研究計画書を書いた時点で、すぐにデータ収集するくらいの素早い行動力が大切だと感じる。タイムスケジュールに沿って研究を進めるのは大変であり、とくに働きながら研究論文を書くときは、かなりの努力が必要である。できるだけ短い期間の(小さい)目標をいくつか定めて、一つ一つ達成しながら進めていくのが大切だと思う。これは、論文を書き上げた今、そのように思うのである。たとえば最初の目標は、テーマが決まったら、先行研究の収集を○月○日までにする。また、データの収集方法を検討して、パイロット調査を早めに行い、○月△日までにする。パイロット調査の結果検討はx月x日までにする。まずは、この辺りまでを一気にできると、本調査がしやすくなると思う。論文執筆も、できるだけ早く始めた方がいい。必要に応じて、新たに先行研究を探す、など、執筆始めるといろいろな改善点に気が付くものなので、とにかく実行あ

のみと感じている。しかし、ずっと努力を続けるは難しいので、途中途中で中休みをして、これまでやったことを振り返ったり、先輩・後輩・友人と研究やそのほかの事を語り合う機会があると、とてもそれが役立つと思う。そして、研究活動中、自分のテーマややり方について迷いが出てくるとは思うが、できれば初志貫徹、しかし、臨機応変に、指導教員とよく相談しながら、自分の決めた道を一步でも半歩でも進んでいくと必ずゴールにたどり着くので、気持ちも健康も健全に保ち進めよう。

回答4：

収集データが人ならよく期間や人数の余裕を考慮しておくこと

回答5：

研究課題の失敗は当たり前のこと。こだわらないで、乗り越えてください。

回答6：

研究テーマを出来るだけ早く設定すること

回答7：

全力を尽くして新しいことを学ぶこと。自分の限界を超えて、チャレンジすること。

回答8：

自分の目標は研究に合っているかどうかを確認すること。大学院レベルは学部とは違う。(修士課程に進学する等) 大学院で研究を継続しようと思うなら、自分の能力・知識の範囲で可能かどうか考えること。

回答9：

自分の研究活動をふりかえってみて思うのは、独りよがりな論文にしないために先行研究や研究仲間、指導教員とのコミュニケーションはとても大切だと思います。また、研究方法の設定や、考察部分などで、自分の限界を感じたときこそ、セミナーや学会などの機会を有効に使い、意見交換や情報交換を積極的に行うことをおすすめします。

以上の回答から、時間管理・健康管理への注意、他者とのコミュニケーションの活用、失敗を恐れないこと等、研究活動と論文執筆の各局面で、多くの研究者が遭遇しがちな難局を乗り越えるための方策や心の持ち方についても、それぞれ言及がなされている。これらは、執筆言語や専門分野を問わない汎

用的な注意事項、あるいは助言と言えるものである。

研究途上、あるいは、論文執筆を終えた段階で、こうした言語化を促すことは、執筆者本人の研究の過程を内省することに有用であり、かつ、今後続く研究を志向する学生である学生にとっても、意義ある助言を提供することになると考えられる。これらは、教員が毎年、助言を行うだけでなく、大学院生による経験に基づいた内省のリソースとして保存し、セミナー運営や個々人の円滑な研究活動を進めるためのヒントになる可能性が高いものと考えられる。つまり、これらの内省の記述は、大学院生達の研究活動の軌跡を参照できる価値ある資源として、次年度以降の大学院生に対し、有用なリソースになると考えられる。

4 結論と今後の課題

本稿で最初に設定した研究課題各々を、以下に再掲する。次に、それらへの回答をまとめて本稿の結論とし、さらに今後の課題を記述する。

- ① 個々の大学院生は、修士論文や博士論文といった論文の執筆過程において、具体的にどのような困難を抱えているのか。
- ② 大学院生が上記①のような困難があると考える理由は何か。
- ③ 上記①の困難と②の理由を踏まえ、今後、指導教員からは、どのような指導や支援が求められると言えるか。

まず、研究課題①については、9項目挙げた中で、70%以上の協力者が困難を感じた対象は、「分析・考察」「自身の論文の推敲」「研究課題の設定」の3点であった。特に「分析・考察」と「自身の論文の推敲」については9割近い協力者が難しいと回答していた。

次に、研究課題②については、上記の3点のうち「分析・考察」の場合、深い論理的思考に基づいた考察を徹底する作業、統計的手法を用いたデータ処理の貫徹、さらには、読者のわかりやすさを意識した記述の面で、それぞれ時間と労力もかかることから、困難を感じていた。2点目の「自身の論文の推敲」については、いずれも、自身で推敲しても問題の箇所を発見することが容易ではなく、かなり負荷がか

かる作業であることが強く意識されていた。同時に、他者に読んでもらってコメントを受ける重要性の指摘も複数見られた。3点目の「研究課題の設定」については、研究テーマの絞り込みや明確さの重要性への認識から、難しさが感じられ、また、目的や方法に合致した適切な研究課題の設定の難しさが語られていた。加えて、自由記述式の回答における引用についても、形式や方法、出典の保存、引用内容の抽出範囲の選択等、内容と形式の両面で難しさが示された。

研究課題③については、指導教員からの査読を受けて改訂する作業や、セミナーへの評価を総合すると、他者からコメントを受ける機会およびコメントの明確さと具体性が有用であることが明らかとなった。セミナーでの研究上のコミュニケーションは、他者の研究内容に関する議論も、文献講読のいずれも、自身の研究への示唆に繋がったというコメントが多く、そのような機会の意義が十分に理解されていることから、それらを継続し、充実させていく必要が認められる。また、大学院生同士のコメントのやり取りも行われていることから、指導教員からの助言のみではなく、大学院生同士が、他者の研究への評価を言語化する機会は有意義であり、切磋琢磨を通して双方の研究上の刺激になることが考えられる。

以上のような研究活動全体における論文執筆の各局面での活動の意義とその目的の意識化を図ること、およびそれを教員や研究仲間と共有して継続していくことが、研究のための支援にとって重要なものであると言える。

質問項目の最後の「後輩へのアドバイス」にも示されていたように、研究活動の経験から、その長い過程における論文執筆の各局面に関する、経験者が語る内省は、具体的に説得力を持ち、今後の大学院生にも役立つ内容を含むと考えられる。そのことから、「後輩へのアドバイス」は、論文執筆を含む研究活動を経験した大学院生の生の声として説得力があり、価値ある有用な支援リソースとして位置付けることが可能であると言える。

最後に、本研究は少数の事例を扱った質問紙調査による分析・考察であり、今後の研究の予備的調査として位置づけられるものである。今後の課題は、質的なアプローチからも、より深く大学院生個々人の論文執筆上の問題・課題を捉え、その背景も検討

しつつ、論文スキーマ形成の状況をさらに明らかにしていく必要があると考えられる。

付記

本研究は科学研究費補助金基盤研究(B)(課題番号21H00537)の助成を受けて行った。

注

- 1) 心理学系の研究においては、例えば、西垣(2011)では、「学生は何のために書くのか」という問いを考える重要性の再認識を促している。「青年の全人的な発達という文脈から切り離されて効率的に教え込まれたとしても、また、「将来論文を書くために必要だから」という文脈とのみ結合して効率的に教え込まれても、学生が自らの世界観を批判的に構築したり、学生同士や学生と教員の間で世界観のやり取りをしたりするといった主体的で能動的な姿勢で、授業において文章を書くようになるとは考えにくい」と批判的な検討を加え(p.5)、現状の問題点の本質を捉えている。
- 2) 村岡(2014a, p.149)では、大学院生の視点に立って、アカデミック・ライティング学習の過程を広く捉えている。つまり、レポートや論文の実際の執筆の局面のみならず、テーマの設定からアウトライン作成、改訂を何度も行い完了する過程までを包括的に捉えており、本稿でもその視座の重要性を認識している。

参考文献

- 大島弥生(2021)「理系中国人留学生による学士課程でのライティングを通じた学びのふりかえり」『専門日本語教育研究』23, pp.3-10.
- 大島弥生(2023)「留学生に対する日本語のライティング指導—これまでの潮流とこれからの展望—」『日本語学』42-4, pp.36-44.
- 長田真理(2023)「法学分野における留学生教育および研究指導」村岡貴子編著『大学院留学生への研究支援と日本語教育 専門分野の違いを超えて』ココ出版, 153-166.
- 西垣順子(2011)「大学におけるライティング教育をめぐる心理学研究の役割—アカデミックライティング教育の現状に対する批判的検討を踏まえて—」『心理科学』32-1, pp.1-8.
- 村岡貴子(2014a)「上級日本語アカデミック・ライティング教育の実践報告—文章の比較・分析・評価タスクによる教材を用いて—」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』18, pp.99-112.
- 村岡貴子(2014b)『専門日本語ライティング教育—

論文スキーマ形成に着目して—』大阪大学出版会
村岡貴子・堀一成・坂尻彰宏（2017）「大阪大学における日本語ライティング教育の実践—2017年度の留学生および一般大学院生を対象とした各授業の報告から—」『大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流』22, pp.23-32.
村岡貴子（2018）「ライティング活動とその内省から獲得する論文スキーマ」村岡貴子・鎌田美千子・仁科喜久子編著『大学と社会をつなぐライティング教育』くろしお出版, pp.35-54.

村岡貴子・鎌田美千子・仁科喜久子編著（2018）『大学と社会をつなぐライティング教育』くろしお出版
山本千映（2023）「経済史分野における修士論文指導—テーマ、史料、分析方法、引用の仕方—」『大学院留学生への研究支援と日本語教育 専門分野の違いを超えて』ココ出版, pp.129-147.
若島礼文・狐塚貴博・宇佐美貴章・板倉憲政・松本宏明・野口修司（2009）「日本における心理学諸学会の倫理規定の現状とその方向性」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』58-1, pp.123-147.